

【環境配慮型水路のモニタリングと順応的管理】

環境配慮型水路のモニタリングは、水路内での採集調査による生息環境としての機能の検証と、水路周辺でのカエル類の調査による移動経路の確保の検証に分けられます。

水路内で調査を行う場合は、タモ網やサデ網、カゴ網などを用いて水生生物を捕獲確認します。また水路では、定置網を下流側に向けて一晩設置することも有効な捕獲手段です。捕獲した生物は、種の同定と個体数の記録を行います。施工後、生息環境が安定するまで時間がかかるため、継続的にデータを蓄積して生息環境の評価を行うことが大切です。

保全対象生物が確認されないなど、期待した効果が得られない場合は、置き石や杭の数を増やしたり、植生を確保したりするなど、さらに多様な環境を形成することに努めます。また、草刈りや泥上げ、ゴミの除去などの維持管理を適切に行うことも重要です。

水路周辺でのカエル類の調査は、アカガエル類の繁殖期である早春に、水田際などに産みつけられた卵塊を確認することや、繁殖期以外も含めて、水路周辺で成体（親ガエル）や幼生（オタマジャクシ）を目視等で確認することが必要です。いずれも確認箇所と確認数を記録し、継続的にデータを蓄積することによって、移動経路が確保されているかを評価します。

カエル類の卵塊等が確認されない場合は、流速が速くて流されてしまっている可能性があります。この場合は、ワンドや杭の設置などにより流速を遅くすることや、生物がつかまるための植生を確保することが必要となります。



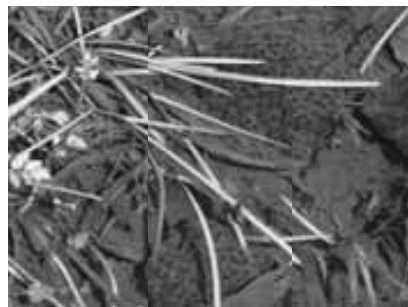
タモ網等を用いて、魚類やカエル類、水生昆虫などを捕獲確認します。



定置網は、入り口を下流側に向けて一晩設置します。



水路をはさんだ水田際などで卵塊を確認することによって、樹林地との移動状況を確認します。



卵塊を見つけたら、場所と数を記録します。卵塊の分布状況によって、カエル類の移動しやすい箇所がわかる場合があります。

次ページから、環境配慮型水路の各工法について解説します。▶▶